☆受難の主日（４月５日）の聖書朗読☆　　※主任司祭からの解説があります。

福音朗読１　（マタイによる福音書　21 章 1～11 節）

イエスの一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。 もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」 それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。シオンの娘に告げよ。

『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。 大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。 そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ダビデの子にホサナ。
主の名によって来られる方に、祝福があるように。
いと高きところにホサナ。」

イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。 そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

この主日は「受難の主日」とも言われていて、イエスが当時の都、政治、経済の中心地エルサレムに凱旋入城するところから始まります。凱旋入城と言ってもイエスにとっては父である神から託された使命、十字架の死によって神と人間の間の和解の生贄となるという重大な使命を果たすためのいわば最期の行動だったのです。ユダヤの人々はそれとは知らず、子ろばに乗ったイエスをあたかもローマの圧政からの解放者としてのイエスを都に迎えて、布を敷き小枝を振って大騒ぎしていたのです。

主日のミサの始まりはその（イエスを大歓迎する民衆の歓喜した）様子を記録した福音書が読まれます。その後のミサの福音では、それとは打って変わってイエスの無残な受難の様子が読み上げられます。受難の朗読です。自分たちの歓迎したイエスが自分たちの欲求を満たさないと知ったユダヤの人々の離反が記されているのです。人間の心変わりの速さが描かれています。

それに対してイエスは父である神から託された使命を果たそうと、ユダヤ社会の権威者たちからの罵倒と非難に何度も転びながら十字架を担ぎ続け、十字架にくぎづけられて絶命するのです。このイエスの行動の原動力は一体何だったのか。放蕩息子のたとえ話。そこにあるのは父から離れていった人間が父の家を目指して帰ってくる話ですが、苦しみと十字架の死を味わって父との約束を果たて帰ってきたイエスを涙ながらに抱き寄せる父なる神の姿を現しているものともいえるのではないでしょうか。

第１朗読（イザヤの預言 50 章 4～7 節）

主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え疲れた人を励ますように言葉を呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる。主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。打とうとする者には背中をまかせひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるからわたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っているわたしが辱められることはない、と。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

ここではあらゆる非人間的なあざけりや虐待に何ら抵抗することをしないイエスの姿が語られています。それは父なる神に全く信頼して、見捨てられる

ことがないと信じるイエスの強い姿、石のように固い姿があります。すべての人が自分から離れても私を必ず救ってくださる神がおられるとの揺るぐことのない信頼です。

第２朗読　（フィリピの信徒への手紙　２章６～11節）

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

　こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。皆さん、肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

ここでパウロは初代教会の人々がイエスをどのように理解していたかを、短く賛歌の形で述べています。あれほどキリスト者を迫害していたパウロがイエスの呼びかけに応えて回心し、キリストから離れないように信徒の皆さんに必死に懇願している手紙でもあります。私たちは生きている間多くの困難や苦しみ悲しみに遭遇します。今全世界で流行しているコロナウィルスもその一つでしょう。でもその困難や苦しみ悲しみから私たちは逃れ得ることを祈るのではなく、それを超えたところにある神さまのみ旨を毎日確実に実行していく信仰心を神に祈り求めることをパウロは勧めています。「恐れおののきながら自分の救いを力を尽くして達成しなさい」と励ましているのです。「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」。このイエスの姿に私たちも倣うようにしたいものです。

福音朗読２　（マタイによる福音書　27 章 11～54 節

　さて、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか」と言った。

　それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったので、総督は非常に不思議に思った。ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしていた。そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは、人々が集まって来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。

　一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなのを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

　それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、

唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。

兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、そこに座って見張りをしていた。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。

そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。

そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、

多くの人々に現れた。百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった。」と言った。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

４人の福音記者はともにイエスの受難の記録を残しています。それほど当時のキリスト者にとってイエスの受難と復活の出来事は自分たちの信仰生活の核心だったのです。昔、イスラエルの民がエジプトを脱出するにあたり、酵母を入れないパンを急いで食べ、かまちに羊の血を塗り脱出していったことをその後の子孫たちが救いの記念として語り継いでいったように、イエスの受難とその復活は、記念として語り継がれていったのでしょう。

おかげで今の私たちにも語り継がれ、ミサとして行われ続けているのです。「これを私の記念として行いなさい」と言われたイエス。それはどれほどまでに人間を愛し抜かれたか、父である神と子であるイエスの愛の表現でもあります。受難の記事はまるで今の言葉を使えば、動画を見ているような、真に迫る描写が続きます。受難を表現した映画はいくつかありますが、本当の出来事はもっともっとすさまじかったのではないでしょうか。

人間を悪に引きずりおろそうとする悪魔と人間を救い、神の栄光に引き入れたいと戦う戦いが行われた激戦の現場ではなかったか。このとき私はどこにいたのだろうか。今日は一つ、声を出して、真に迫ってイエスの受難の記録を朗読してみましょう。